

Charles François Daubigny

シャルル＝フランソワ・ドービニー(1817～1878)



マント橋(1867 年作)

油彩 21.7×43cm

1857 年レジオンドヌール勲章を授与

パリ生まれの風景画家でバルビゾン派の巨匠である。

自然をありのままに写す作品はブーダンら初期の印象派の態度に近い。

ゴッホ最後の地となった南仏オーヴェール＝シュル＝オワーズの

風光を発見したのも彼であり、銅版画にも優れたものがある。

水の画家・バルビゾン派七星 ・印象派の先駆者

Charles François Daubigny

シャルル＝フランソワ・ドービニー (1817～1878)



右、同日夕方に描いた同じ大きさの作品
二点に分けて昼の部分と光量が少なくなる
夕方に分けられて暗闇迫る光の効果を描いたものです

作品名 マント橋(1867年作)

種類 板に油彩

サイズ 24×44.5cm

Robert Hellebranth 著ドービニー カタログレゾネにNO67として掲載

略 歴

パリ生まれ。父 Edmond François Daubigny、
叔父 Pierre Daubigny も風景画家であり年少時より教育を受けた。

1834年にフォンテーヌブローの森などで作品を制作して以降、
多くの土地を旅行してまわり、戸外での観察を重視して風景画を多く描いた。

1857年からは、自身の所有する小舟「ボタン号」をアトリエとして使用し、
オワーズ川やセーヌ川に浮かべて舟の上から制作する事もあった(このアトリエ舟での制作手法は後にモネに受け継がれた)。

1860年以降はパリ郊外のオーヴェル＝シュル＝オワーズに住んだ。
1868年にはサロン(官展)の審査委員を務め、モネなどの後に印象派を形成する事になる若い画家たちを積極的に評価した。

バルビゾン派の一人に数えられ、印象派につながる重要な先駆けを果たしたと言われる。1857年にレジオンドヌール勲章を授与されている

今年2016年オランダ・アムステルダムのごッホ美術館にて、【ドービニー・モネ・ゴッホの風景の印象展】が開かれた(九月～一月)ドービニーの80号以上の大作が多く展示されドービニーとモネ、ゴッホは同格かそれ以上の評価であった。この作品は1867年おやじさんと慕っていたコローとも関連あるマントの橋で、もう一点同じ日の同じ構図のこの後の時間帯を描いた夕暮れの作品がある。2点の作品を通して光の移り変わりを見事に描いている作品であり印象派のリーダーとしての魁の作品である。

印象派の先駆者・水の画家と呼ばれている